

“大切な花”を咲かせよう



子どもの発達支援施設
つつじが崎学園

保育所等訪問支援通信NO. R5-2



新年度スタートから3ヶ月が経ちました。環境に慣れて子ども達も少しずつ園生活のリズムに馴染んできているのではないのでしょうか？さて、今年度は“発達障害の子どもの自己肯定感をはぐくむ”というテーマでした。今回は、自己肯定感を失い“うつ病”や“不安障害”等の二次障害になることを防ぐ必要性についてお話していきます★



悪循環で自己肯定感をさらに下げないように注意!!



まずは発達障害自体を理解し、起こりやすい問題を予測する



ADHDの子は記憶力に秀でているゆえに、うつ病を引き起こし易い傾向が見られます。ASDの場合、他人への関心が薄く、社会生活でトラブルが生じるとひきこもりになりがちです。多くの二次障害の原因はこの自己肯定感の低下です。保護者や周囲は発達障害のタイプによって起こりやすい問題を予測し、これ以上自己肯定感を損なわないようにしなければなりません。更に、子どもの得意なことを見つけ、伸ばし、いきいきと生きていけるような手助けが欠かせません。

発言の背景にある

「みんなと違う」つらさを理解する

二次障害を起こさないようにするには、周囲が「普通」から外れても存在を否定しないことが大切です。発達障害のある子は、自分のことを「ダメなやつ」「わるい子」など、否定的な言葉で表現することが増えてきます。本人に明確な自覚がなくても、周囲の対応に傷ついたりし、つらさを抱えていることが原因です。できること、できないことの差が大きくなり、周囲から否定的に扱われることが増えるために、なおさら生きづらさに悩むようになります。

重要!

自分が受け入れられている

感覚をもつことが大事!!

先生と保護者がしっかり連携をとり、情報交換をしながら支えていくことは重要ですが、まず家庭を癒しの場として機能させることを心掛けましょう。子どもが言うことを聞かず、叱りたくなることも多いでしょう。でも四六時中イライラしていたら子どもの神経が休まりません。家族にありのままの自分を受け入れてもらえると、自己肯定感が生まれます。外で辛いことがあっても、家で「大丈夫、これでいい」と自分にOKを出せるようになることが重要です。お家で頑張り過ぎていないか、頑張らせ過ぎていないか、ということを観察・聞き取り”することも先生達の大切な役割です。

発達障害のある子は、言葉の発達・他者視点・対人関係・自分の認知を客観的に認知する力・よい自分もわるい自分もそのまま認める自己肯定感……人が社会で生きていくためには、いくつもの力を身に付けなければなりません。大人の共感が、子どもの安心や自己肯定感の基盤になります。子どもが何に関心を示しているかを知り、子どもの見ているものを見て、視線をこちらから重ね合わせ、同じものを見ながらその子が感じていることをイメージし、ボソッと言葉にして伝えてみましょう。子どもは大人の言葉に気付き、言葉を重ねます。そうやって大人の共感が生まれます。こうしたことを繰り返し、「ありのままの自分でいても大丈夫」という自己肯定感を持つことができます。診断名が付いているとそれにとらわれて、子どもの個性を障害の特性で決めつけたりしがちです。発達障害はタイプごとに程度の幅が広く、複数のタイプが重なっていることもあります。傾向を理解する必要はありますが、その前に子どもの個性を見ることが大切です。

参考図書：『発達障害の子どもの自己肯定感をはぐくむ本』小児精神神経科医 どんぐり発達クリニック院長 宮尾益知 監修

～お知らせ～

9月13日(水)に県立文学館にて、つつじが崎学園主催の保育所等訪問支援研修会が開催されます。表題『お互いを認め合い、共に育つ～特別な支援は本当に特別なか?ひとりひとりが楽しく安心した生活を送る為に、私たち保育者・支援者に求められること～』講師は、山梨学院短期大学保育科学長の遠藤清香先生です。7月上旬に要綱を郵送いたします。沢山のご参加をお待ちしております。

児童発達支援センター つつじが崎学園
地域支援事業部 保育所等訪問支援
〒400-0013

山梨県甲府市岩窪町614番地



Tel 055-251-7678
Fax 055-251-7679
Mail yoda@tutuij.or.jp

担当：吉岡かよ 武藤理紗 大柴知子 依田由佳